

授業科目名	担当教員名	授業実施日	※
学問の面白さを知る(第12回) 生活活性物質の化学と生物学	坂神 洋次	7月13日(火)	
学生番号	学部・学科	学年	氏名
01100004-0	文・人文	1年	安藤 成里人

この講義では、生物学に関する話題が多く登場し、高校時代に生物を選択して以来自分には非常に興味をもつてきた。その中でも特に印象に残っているのは、役に立たない研究も重要であるということだ。これは今年も納得できた。なぜならよく考えてみると、一見役に立たない研究が後に成る成果を出すということも実際にはあるからである。例としてこの講義の最初に出てきたジバチンという植物ホルモンの発見について話そう。これは言われている通り、馬鹿苗病の原因物質から発見されたものであるが、おそらく最初はそのようなネガティブな側面を持つものから役に立つ物質が発見されるとは考えられていなかったであろう。その予想外の結果がでたことはあるため、役に立たないことが捨て、一時の利害のみを考慮してその研究を決定することはよくないことをよく思うわけである。

また抗生物質の生成は微生物が主に関わっているということも知られて知れた。微生物は目に見えないものであるが、日常的にはあまり意識しないものである。けれども、そのような世界の外縁には存在する。そのようなものが、人間の生存に不可欠なものになっていることが意外に思われた。エントロピーの法則、これは人間が見つけてきた微生物が全体のわずか1%にすぎない。しかし、人間が思っていたのはわずか1%の微生物で

現在のようにオビニク⁷の抗生物質(オビニク⁷)や抗高脂血症剤等が、
ヒトに与える効果、あるいは副作用、あるいは微生物が見つかるといって、
この抗生物質の性質や作用のメカニズムを研究、開発という計算機ではないが、
理論的に上へいくことは限らない。けれども私はそうも思わない、
オビニク⁷の希望を見出したのである。

「研究にあつては日本代表になつても意味はない。世界大会で表彰台にのぼるこ
うにしたい。講義中に言われた言葉も忘れたままにして、
のびのびと生きていきたいと思います。」